

### <論文> 『伽婢子』論：乱世を語る方法

加藤, 良輔 / カトウ, リョウスケ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

62

(発行年 / Year)

1993-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019669>

# 『伽婢子』論——乱世を語る方法

加藤良輔

たと考えるのである。

一

浅井了意作『伽婢子』（寛文六年へ一六六六刊）十三巻六八話のほとんどが、その背景や舞台として戦国乱世を描いている。江本裕氏は『伽婢子2』（東洋文庫四八〇）の解説において「作者が『戦国』を扱うことによって、一種の歴史を語ろうとする姿勢」に注目し、巻二ノ一「十津川の仙境」と巻五ノ二「幽霊評諸将」とをあげられ、

この二話を併せれば、武家政権興亡の歴史、平氏による政権確立に始まりそれがやがて内部抗争等で互解して乱世に突入し、やがて真の統一者が現れるところで終わるのである。豊臣秀吉にまで及ばなかったことにも意味があると思うのだが、ともかくこの二篇には、歴史を語る意図が籠められてい

と述べておられる。<sup>(註1)</sup> さらに付け加えれば「十津川の仙境」における長次の語りが戦国大名の勢力見取図であり、戦国乱世とはいかなるものかを概論的に説いたものであるのに対して、「幽霊評諸将」で山本勘介等四人の幽霊が長尾謙信・北条氏康・武田信玄・織田信長ら代表的戦国大名について論じ合う場面を、いわば各論としてとらえることができるだろう。

さてまず問題としたいのは右の二話及び巻九ノ二「下界の仙境」の三話にあらわれる弘治二年という年号である。江本裕氏によれば<sup>(註2)</sup>『伽婢子』であつかわれる時代は明德から天正までの約二百年間であるが、弘治二年のようにある年号が三回も明示される例は他にない。このことにはどのような意味があるのだろうか。

「十津川の仙境」と「下界の仙境」とを読み比べてみる。両話  
はともに仙境にふみこんでしまった者の話であるが、また対照  
的に語られてもいる。以下いくつかの点を列挙してみる（Aは  
「十津川の仙境」、Bは「下界の仙境」）。

① A 長次は薬草を採るため山に入って道に迷い、谷川に美し  
い籠が流れているのを見付け、その流れに沿って登って行  
くと「岩をきりぬきたる門」に着く。

B 金堀は百丈も井戸を掘ったが水は出ない。休んでいると  
地中から犬や庭鳥の泣き声が聞こえるのでさらに四、五尺  
掘ると、かたわらに「切どをし（江3）の石の門」があった。

② A 門を入ると茅ぶきの家が五、六十軒、「誠に住ならした  
る村里」があった。そこに居る人々は「古風ありて、すは  
うはかまにゑぼうしきて、行還（ゆき）しづかに威儀みだりなら  
ず」という様子であった。

B 門に入り暗い道を抜けると空には太陽が輝き高峰が連な  
っている。さらに進むと山間に宮殿楼閣があり、そのあり  
さまは「玉をかざり、金をちりばめ、瑠璃の瓦、瑪瑙のは  
しら、心もことばも及ばれず」、そこに居る者は門番です  
ら「容（かほ）のうるはしき事玉のごとく、唇あかく、歯白く、髪  
は紺青の糸のごとし。みどりの色なる布衣（ほい）、くろきゑぼし

着て」おり、他の者はもちろんのことみな美しい。

③ A 住んでいる者たちは長次の時代（弘治二年）からさかの  
ぼること三百数十年前に死んだはずの平維盛主従とその子  
孫たちであった。

B 住んでいるのは修業中の仙人達で、金堀はもとの穴にも  
どると富士山の麓に出てしまう。驚いて江戸に帰ると百年  
が経っており弘治二年になっていた。

④ A 仙境が存在するのは紀州の山奥、十津川の上流。

B 仙境の入口は江戸の地下であり、出口は富士の麓の洞  
穴。

整理をすれば以下の如くだらう。「十津川の仙境」は、そこ  
に至るまでの道のりが上昇方向であり①、古風な人々が農  
村的世界に住んでおり②、訪問者は過去の人々と歴史とに  
出会い体験する③。その場所は山中の異界である④。一  
方「下界の仙境」は、地中深く存在するので、そこに至るには  
下降方向に進まなければならず①、仙人たちはきらびやか  
な宮殿楼閣に住み②、訪問者はそこを通過することによつ  
て未来へと送り出される③。その入口のあるのは江戸であ  
り、江戸とは読者（近世の）にとって政治経済の一大中心都市  
であった④。

以上の比較をふまえれば両話が「仙境」を間にはさんで見事  
に対をなす話として作られていることがわかる。そこで両話に  
あらわれる弘治二年をみてみる。「十津川の仙境」における長

次の語りは次のようにして終わる。

古しへ安徳天皇西海におもむき給ひし寿永二年癸卯より、今弘治二年丙辰の歳まで、星霜三百七十四年、天子すでに廿六代、鎌倉は頼朝より三代、北条家九代、足利家十二代、京都の足利今すでに十三代、新將軍源義輝公と申す也

「今……まで」「今すでに」とくりかえされ、弘治二年は三百七十四年の歳月がたどりつく「今」、過去から現在への流れの終着点として作者の強い意志によつて設定される。対するに「下界の仙境」は次のようにして終わる。

駿河の国、富士のふもとの洞より出て、大におどろきあやしみ、江戸にかへりて太田道灌の事を尋ねれば、それは、や百年以前也。井をほらせられし事は、聞つたへたる人もなく、又その跡もなし。人あらたまり、家立かはりて、本城は大にさかえたり。わが家を尋ねるに、いづくともしれず、一族の末も聞えず。つらく思ふに、長禄元年江戸の城はじまりて、今弘治二年丙辰まで、一百年に及べり。

金堀は長禄元年（一四五七）から弘治二年（一五五六）へと一気に突きぬけてしまった。自身はその間半日ほどの時間経過しか感じなかったのだが。浦島伝説をもちだすまでもなく、こうした話はもちろん物珍しいものではなく、『伽婢子』の中でも

他に卷六ノ一「伊勢兵庫仙境に到る」等がある。右のように「下界の仙境」においても弘治二年は時間の流れの終着点として「今……まで」と強調されている。長次は過去の人物平維盛と語り合い、金堀は百年後の江戸を見る。過去が現在と、現在が未来と出会う点が弘治二年である。両話ともに「今弘治二年丙辰（の歳）まで」とほぼ同じ表現をされていることに注意したい。三百七十四年あるいは一百年という時の流れの到達点として、また現実世界とは異なった速度で進む時の流れの消失点として「今弘治二年」はある。弘治二年はいわば過去・現在・未来と連なる鎖のミッシングリンクとして設定されていると考えられるだろう。仙境という非現実・非日常の空間を通過することによって現実の時間は乗り越えられてしまうことを了意は示す。しかしその時（点）が何故「弘治二年」なのか。

### 三

現代の歴史年表をひらいてみても弘治二年はいわゆる戦国時代の中でありながら、歴史の節目となるような大きな戦闘や政治的事件はみあたらない。四月に美濃で斎藤道三がその子義竜と戦つて敗死する。同月、朝倉義景が將軍義輝の斡旋により加賀一向一揆と講和する。主な事件はこれぐらいだろうか。京都には三好長慶がおり、彼の全盛期であつて畿内では一時戦乱が治まる。今谷明氏は「三好・松永政権小考」の中でこの時期について次のように述べておられる。

すなわち長慶独裁時代は、室町幕府の文書を京都から全く締め出すことで成立し得たのである。かかる状態は室町幕府始まって以来のことであり、かの織田信長ですら、入京当初から元亀にかけては幕府奉行人奉書を利用して畿内支配を試みていたことと考え合わせると、長慶の実権掌握は画期的な事件であるといえよう。(中略)

將軍義輝が巧木に逃避していた天文→弘治にいたる五年間、三好長慶の全盛期であり、芥川城主長慶の号令は城・和・撰・河・泉の五畿および丹波の六か国を中心に、近江・播磨の一部、さらには本拠讃岐・阿波・淡路に及び、実に九か国を領する一大戦国大名の観を呈した。この領域は応仁・文明の乱後に細川政元が把握していた旧細川家の領国にほぼ匹敵する。<sup>(注4)</sup>

陶晴賢の謀反による大内義隆の追放は『伽婢子』において何度もくりかえし語られる事件であるが、その年号天文二十年(二五五二)が作中に記されることがないのは、西国の大家の没落という事件の大きさ故に広く記憶され、ことさら年号を記さずとも『伽婢子』の読者には了解されていた、あるいは了解されるものと作者が考え得るほどに「有名な時」だったからであらう。ならば「弘治二年丙辰の歳」という具体的な年号を記される時は、背後に歴史的大事件を有していない「無名の時」だったと考えられる。過去・現在・未来の三つの時が交錯する

時の点が、歴史に作用を及ぼす重大事件を背負った時であってはリアリティが損われると作者は考えていたのだらう。<sup>(注5)</sup> 歴史上に持つ意味の軽さによって弘治二年は人が時間を越える、時の流れに逆らうという不思議のおこった時の点として設定されるのが可能だったのである。弘治二年は『伽婢子』出版の年、寛文六年からちようど百十年前になる。百十という数字の切りよさに、作者の話の話を仮構する意志、フィクション化への志向が読みとれはしないだらうか。

また弘治年間には三好長慶が京都という日本の中心を制圧していた時期であったことは先に今谷氏の論から引いた一節でもわかるとおりだが、その三好長慶は了意にとつて下剋上の代表者であり、了意には秩序が壊れ、下と上とが反転していた時間であったという認識がある。「十津川の仙境」において長次は「今(弘治二年)」の世のありさまを「諸国の武士たがひにそばだち、天下大にみだれて合戦やむときなし。(中略)其外諸国郡邑の間に党をたて兵をあつめ、たがひに村里をあらそふて、せめた、かひうばひとる。」と語っている。社会のそれまでの秩序が混乱し反転している時には、時間の流れに異常があつても違和感がない、そう作者が考え虚構したということもあり得るだらう。

先に弘治二年を「無名の時」と書いたが、『伽婢子』においてこの年号にはもう一つの意味が与えられている。巻五ノ二「幽霊評諸將」の多田淡路守の語りの中で、織田信長が今川義元を亡した年を「弘治丙辰の年」としているのである。この世

にいう桶狭間の戦は実際には永禄三年庚申（一五六〇）の出来事であり、弘治二年は誤まりなのである。しかしこれを作者の不注意による誤記として見過ごすことができるだろうか。弘治二年はその歴史上の無名性の故に時のミッシングリンクと設定されたはずだったが、ここではその無名性は史実との齟齬をきたしてまで強引に歴史における興味性を与えられている。衆知の如く信長は義元を打ち破ったことにより一躍戦国諸大名中の雄になった。桶狭間の戦は信長の天下一統への最初の一步であり、その後豊臣秀吉・徳川家康と続いて完成された近世武家政権下の社会に生きている『伽婢子』の読者と了意自身にとって大きな歴史的事件であったに違いない。また了意には正しい年号を確認する手段として、<sup>(注6)</sup>彼が『伽婢子』執筆時に利用した『將軍記』や『信長記』があつたはずで、事実それらには永禄三年と正しく記されている。ならば作者がここで行ったことは歴史を書き換え、あるいはねじまげることだったのではないか。それが作者において意識的か無意識的かは分明ではないが、『伽婢子』のテキストにおいて弘治二年という時は、過去と未来とが交錯するミッシングリンクであると同時に、乱世から平和への一大転換点としてその神秘性を増し、聖なる時へまで高められているといえるだろう。

#### 四

「幽霊評諸将」における多田淡路守の幽霊による織田信長評

は、この話が設定されている永禄九年（一五六六）には未だ道なかばであった信長による天下一統の子言によって終わる。

今の世には大業さだめて信長に立べし。信玄・謙信・氏康はいたづらにわが領国に勞れ、死給はんものをといふに、座中この事を感じける

多田の予言と、同席する武將の幽霊たちが無言のうちに感嘆・同意を示す場面は、読者には既知の歴史の推移が語られるにすぎないが、既に知っているからこそ予言の成就は確かなものであり、故に読者一人ひとりの運命観（因果観）を刺激して、この話に迫真性を与えているのである。作者は『伽婢子』において信長による天下一統の予告までしか語らなかつた。その成就も、秀吉の小田原攻めも家康の関ヶ原の戦も語ることがない。体制（『伽婢子』出版時の）に対する何らかの自己規制を考へることもできようが、また一方で、作者は信長登場以後の歴史を天下大乱から統一そして安定へと一つ一つの流れと見、戦国乱世とその中で翻弄される人々を描く作品には、それ以上は蛇足であると考えたのであろう。弘治二年（史実では永禄三年）の今川義元軍に対する織田信長軍の勝利を予言として書けば足りたのである。

歴史は幽霊たちの語り合ったとおりに進む。時の流れはあらかじめ示され、それに逆らうことはできない。こうした話は『伽婢子』中で幾度も語られる。<sup>(注7)</sup>下剋上の世、乱世を描く『伽

婢子』は右のような歴史認識を背後にもっていると思われるが、その歴史認識そのものを語った話が巻四ノ四「入棺之尸甦恠」である。他の話にはある物語を語る、説話を説くという姿勢がこの話にはなく、むしろ評論か随筆のように書かれている。

「入棺之尸甦在」は死者の甦生という怪異が「下剋上の先兆」であり、故に甦った者をその場で打ち殺さなければならないと説いている。これは一見、時の流れの中で目前に迫った下剋上の騒乱を未然に防ぐ方法が説かれているごとくである。けれども例としてあげられている二つのエピソードはこの方法の実行の不可能なことを示している。大内義隆や足利義輝の家で死者の甦える事件があった。周囲の人間はやはりその死者を打ち殺そうとするが、あるいは「無下にかはゆしとて」あるいは「さすがに不敏の事とて」家に連れ帰ってしまう。結果、各々「その年」に義隆は陶晴賢に追放され、義輝は三好長慶・松永久秀に叛かれる。作者自身「葬場にて生たるをばもどさずして打ころす。誠に残りおほし。」と話のはじめに述べ、また「この理はある事歟、なき事歟。さもあれ、死人の一族は残りおほく侍べらんものを。」と話を結ぶ。下剋上は予め死者の甦生として示されるが、歴史の流れを変え下剋上を防ぐために死者を再び殺害することが遺族たちには出来ない。作者もそれを心情的に仕方のない事だと考える。そして下剋上は予告通りにおこるのである。

福尾猛市郎氏は下剋上について次のように述べておられる。

下剋上といいうる歴史事實は、古今東西数限りなく存在し、それらを指弾すべきものとする思想も共通する。ところがそれを忌む道義観と並行して、日本の中世ではすべての事實を因果の理法にもとづく必然の現象として肯定する思考が他の時代や他国の歴史よりも特に強いように思われる。因果の観念は、前世が因でその報いが果として現世に現われ、また現世が因となって来世に果を生ずるとするものであるが、そのほかに、現世における事実相互間にも因果をたずねる思考が存在した。慈円における「道理」も主としてこうした因果による必然論に立つもので、高度な歴史観のように説明されがちであるが、愚昧な庶民大衆においても、すべての事實を前世の宿命だとか運命だとかするほかに現世の因果として必然とする理解があったとみてよいのではなからうか。「下剋上」もあるいは凶相とされ、あるいは非道德とされながらも、それらを道理の因果として、避けえない必然とみる論理なのである。(注も)

こうした下剋上を必然ととらえる中世の考え方は「入棺之尸甦恠」から読みとれる歴史観・運命観に引き継がれていると思われる。本話は下剋上を防ぎ得なかった失敗例として二つの出来事あげているのであり、『伽婢子』全体をみても巻八ノ五「屏風の絵の人形躍歌」などをその典型として、下剋上の必然であることが語られている。ただ因果の理が話の背後にあるの

ではなく、作者におけるテーマそのものとして語られ、結果、ストーリーらしきものがない評論の形で語られているところが「入棺之尸甦恠」が『伽婢子』中で特異な一篇となった所以であらう。

## 五

卷一ノ二「黄金百両」では、前世—現世—来世の三世にわたる因果応報と現世における事実相互間の因果応報が二つながら語られている。前者は文兵次における因果として、後者は松永長慶・由利源内主従における因果として語られる。兵次は前世において泊瀬近郷の領主だったが「百姓をむさぼり、賦斂ふれんをおもく課役を茂くして、人のうれへをしら」なかつたために「しばらく富貴を極めしかども、昔の業感によりて今かく貧しくあるのであると、清性館（池の中の異界）で兵次が出会った老人によって因果応報の理が説かれる。兵次が老人に窮状をすくわれるのは、泊瀬観音に対し信心おこたりなかつたことと、源内殺害をその妻子のために思いとどまつたこととによっていゝ。そして松永は今「大なる不義をおこなひ、権威よこしまに振ふて民を虐しへなげ世をむさぼ」っており、その源内は「これにしたがひ、悪逆無道なる事たとふるにことばなし」であるが故に、松永は織田勢によって亡され、同じく源内も殺されたうえに財宝をうばわれてしまう。

本話と、原話とされる『剪燈新話』卷一ノ二「三山福地志」(注9)

とをくらべるに、江本裕氏は「原話が元自実（原話の主人公、本話の文兵次にあたる——引用者注）を『質鈍』『詩書二通ゼズ』としているのに対し、本話の文兵次が『心ざし情ある者』と変え、繆君ぼく（本話の源内にあたる）の人柄について原話は特に言及しないのに、源内は「生才覚」な男と設定され「ほとんどその人となり逆転」していることを指摘され、「本話において作者が勸善懲惡をより徹底させようとしている意図」を読み取っておられる(注10)。しかし改変されているのは人物の人柄・性格にとどまらず、彼らが社会においていかなる存在であったか、その位置をも変えられている。元自実は「家頗る豊殖、田庄を以て業」(注11)として一方、文兵次は河内国平野に住む有徳人とあるだけで、その職業は明示されていない。けれども元自実が福寧に一家で移住した後「田を墾し圃を治めて居る」のに対して、兵次が「山科のおく笠取の谷に引きこもり、商人となり薪を出し売りにて世を渡るわざとす」とあること、また兵次のもとの住所平野（現在の大阪府柏原市）が古来大和国への交通の要衝であったこと(注12)を考えるならば、元自実は農村社会に属す人物であるが、兵次は農村あるいは農民からある程度の距離をもつた存在として設定されていると見るべきであらう。また江本氏の指摘された人となりについても、元自実が非知識階級に属する者であるのに対して、兵次は、「心ざし情ある者」という設定が『伽婢子』においてもつニュアンスから考えるに、知識階級に属するかあるいはそれに準ずる位置に居る者と読みを推し広げられるだろう。

右のことは元自実と兵次が現世において貧窮することの原因である前世での行いの差異、つまりは因果応報のあらわれ方の違いに関連してくる。元自実は自らの個人的な傲慢の故に前世のテクノクラートから現世の文盲の愚者へと転じており、「子亦罪なし」といわれるように、社会的地位・権力の悪用といった罪悪は行っていない。対するに兵次は前世に行った農民への苛斂誅求により今貧困に落ちいつていと語られる如く、因果に権力者への批判が付加されている。こうした原拠離れを松田修氏は「了意作品における批判的リアリズム」とされ、「施政者の非人間性に対する怒りは、彼（＝了意。——引用者注）にとって最重要の属性、むしろ終生の妄執ともいうべきもの」と述べておられる。従うべき説であるが、筆者の述べてきたことと合わせ考えれば、時の流れは必然であり、それは因果の理に基づくという『伽婢子』における歴史認識には「勸善懲惡」あるいは「批判的リアリズム」といわれる如き価値判断の原理があることが見出し得るといえる。

付け加えるに、兵次が前世―現世においてついに当時（それは作品刊行時の寛文期でも同様であるが）の基幹産業である農業とそれに従事し人口の大半を占める農民たちとの共感同盟関係には到達しないことがある。『伽婢子』には武士や商人は多く登場するが地主階級（注15）をのぞけばいわゆる農民（田畑を自ら耕す人）と明らかにわかる人物は、巻九ノ四「人面瘡」の山城国小椋の農人、巻十三ノ二「幽霊嬰兒に乳す」の伊予国風早郡の百姓、巻十三ノ三「地瘻の中より出」の河内国錦

郡の農民の妻などがそのわずかな例であり、いずれもが作品として短い奇譚であり、具体的な姓名を持たない人物たちであることから、農民が「個」ではなく「衆」としてとらえられていると見られる。権力者への批判といいつつも、非権力者・被抑圧者の悲劇はその「個」としての顔を見せずに語られるのである。「黄金百両」において、原話にはあつた主人公の農民的性格は先に見たように商人的（あるいは都市民的）性格に改変されている。作者の視点・興味が農民たちにどれほどの共感を持って向けられていたかには、いささか譲歩が必要であろう。（注16）

## 六

「黄金百両」に登場する松永長慶は、「三好は京都にあり。其家老松永は和州に城を構へ」とあり、「織田家のために家門滅却せらる」とすることから三好長慶の家宰である大和信貴山城主松永久秀の誤りである。また久秀ならばそのその自害は天正五年（一五七七）であるのに、ここでは「永禄庚午の年」つまり永禄十三年（一五七〇）と誤っている。

江本裕氏は「冒頭で『松永長慶』と誤るほどこの期の武将に対する了意の観念は固定していた（注17）」と考えられ、年号の誤りについては「作者了意が本書執筆に際し繁く利用したと思われる『甲陽軍艦』には、『永禄十三年庚午ノ年、松永弾正切腹す』（品六）とあり、これも作者が『甲陽軍艦』に拠る処多いことの一証」と述べておられる。（注18）了意の固定した観念とは、戦国期

の下剋上の代表者として了意が三好長慶と松永久秀を混同するほどに批判的であったとの意であろうか。

市古夏生氏は巻三ノ四「梅花屏風」について考察し、次のように述べておられる。

『將軍記』と『將軍家譜』の陶晴賢の謀叛により義隆が自害したところを引用したわけであるが、これらと「梅花屏風」の導入部を比較すると、一読して類似する表現が多いことが察せられよう。例えば、三書ともに義隆自害の地を「大亭寺」と記しているが、ふつうは「大寧寺」と書くのである。(中略) 従来何人なるか不明で、了意が創り出したかに思われた藤原基頼は、実在の人物で、藤原親世と思じく剃髪逃亡していたのであった。それを基頼の人物像のみ作り変えて諸芸の達者として描き、主人公に仕立てあげたのである。<sup>(注19)</sup>

市古氏はここで『將軍記』『將軍家譜』によって藤原基頼を実在とされているが『公卿補任』天文二十年の条にある藤原基規が正しくは実在の人物と思われる。読みが似ているためか、モトノリがモトヨリと誤られているのである。つまり先の江本氏の指摘と合わせ考えれば、誤りにも典拠があるといえよう。「黄金百両」にしても、この「梅花屏風」においても、作者による史実の誤りは同じパターンで繰り返されている。了意は一つの典拠に記されている「史実」を複数の史料によって確認する作業を行っていないことがわかる。江本氏が「典拠の二重

利用<sup>(注20)</sup>」といわれ、市古氏が「史実に乗っ取り、極めてリアリティに富む我が国の話に作り変えた」と述べられる<sup>(注21)</sup>『伽婢子』の語りの方が、史実を正確に記述することに關してはやや杜撰であったと言い得るだろう。この事から『伽婢子』が短時日のうちに一気に書きあげられた作品ではなかったか、という推測が成り立つのではないか。

しかしこう読むことも出来はしないだろうか。作者の誤りを誤りととらえるばかりではなく、歴史の虚構への意志の結果として。「松永長慶」という誤記が江本氏のいう如く作者の時代に対する固定した觀念の故だとするなら、むしろ下剋上という時代の流れを体现する人物として創出された者と「松永長慶」を読み変えることは不可能だろうか。卷十一ノ三「易生契」で暴政をふるう大友左衛門佐なにかしは北九州に勢力を張った戦国大名大友氏を面影として虚構された独裁者である。歴史とは物語の謂であり、書かれるにしろ語られるにしろ、それが創造的作業の産物であるならば、了意も『伽婢子』において戦国乱世という一つの歴史を虚構したといえるだろう。

#### 引用および注

- 1 江本裕氏『伽婢子2』東洋文庫四八〇(一九八八年)解説
- 2 注1書解説中の表(一)による。
- 3 江本裕氏『伽婢子1』東洋文庫四七五(一九八七年)よ

り。以下『伽婢子』本文の引用は全て本書および注1書に拠る（振り仮名は原則的に省略した）。

4 今谷明氏「三好・松永政権小考」（『室町幕府解体課程の研究』一九八五年 所収）

5 坂卷甲太氏は卷九ノ三「金閣寺の幽霊に契る」が大永乙酉（大永五年＝一五二五年）に時代が設定されている事について次の様に分析されている。

「真紅撃帯」や「遊女宮本野」の場合のように戦乱の事実  
に虚構を溶解させて信憑性を獲得するという現実を基軸と  
したリアリティではなく、あくまでも虚構は虚構のまま  
のリアリティのために敢えて大永五年を設定したというこ  
とである。虚構そのものを真実らしく楽しむのである。  
（中略）なまじ現実を引きつけて溶解させることはフアン  
タジーの有効性を損うことになり、読者はいやおうなしに  
それにとらわれざるを得ない。こうみてくると、時代は無  
雑作に配置されたのではなかった。（以上『浅井了意 怪  
異小説の研究』（一九九〇年）第三部第二章「死生交婚譚  
その二——『金閣寺の幽霊に契る』——」より。初出は  
「了意怪異小説試論その六」の題で「就実論叢」第十五号  
一九八五年十二月 に発表）

6 注1書「出典一覽」参照。

7 卷五ノ三「焼亡有定限」・卷六ノ六「死難先兆」・卷八ノ  
五「屏風の絵の人形躍歌」・卷十二ノ六「大石相戦」・卷十

三ノ八「馬人語をなす怪異」等があげられよう。

8 福尾猛市郎氏「『下剋上』の論理」（『日本歴史』二四八号  
一九六九年一月）

9 注6に同じ。

10 注3書「出典」の項（三〇頁）。

11 以下「三山福地志」の書き下しは『国訳漢文大成』文学部  
第十三卷（一九二一年）所収の塩谷温氏による『国訳剪燈新  
話』に拠る。

12 平凡社『世界大百科事典』（一九七二年）の「柏原〔市〕」  
の項には、「古来、大和への交通の要地として知られ（中略）  
付近には文化的遺跡が多く（中略）近世には、大和川舟運の  
終着点として、柏原船、茶船の往来が盛んであった」とあ  
る。これは平野近辺が農村というよりも都市的な環境であっ  
たことを示しているだろう。

13 卷四ノ二「夢のちぎり」の船田左近は「心ざま優にしてな  
さけふかく」「家富てゆたか」であり「色ごのみの名をと」  
っている。卷十二ノ一「早梅花妖精」の埴科文次は「心ざま  
なけふかく、武をまなぶいとまには敷島の道をひ、軍陣の砌  
にも、陣所の風景おもしろき所にては、一首をつくりて思ひ  
をのべ、諸軍の興をもよほさせ」る人物である。また卷十ノ  
三「析て幽霊に契る」の上杉憲政の娘弥子は「心のなさけ色  
ふかく、ゆうにやさし」い美女である。これらの人々はみな  
知識階級に属しているのであり、こうした例をみるに、「心  
ざし情ある者」という簡略な設定においても同様のニュアン

スを感じ取れると思われる。

- 14 松田修氏『新版日本近世文学の成立——異端の系譜』（一九七二年）第二部第二章『浮世物語』の挫折——仮名草子における批判的なりアリズム——。初出は「国語国文」第二六卷五号 一九五七年五月。

- 15 卷三ノ二「鬼谷に落ちて鬼となる」の峰谷孫太郎、卷四ノ三「夢のちぎり」の船田左近、卷六ノ三「遊女宮木野」の藤井清六、卷十一ノ三「易生契」の豊田孫吉などが地主階級に設定されていると考えられよう。

- 16 『伽婢子』において商人や職人たちは、彼ら本来の性質（中世的な意味での）によるためか、各地によく移動しているし、武士たちは戦国乱世の時代の中で領土拡大の為あるいは天下取りの為に東奔西走している。そして僧たちも諸国を歩き回っている。一方、一つの土地から移動することの稀な農民たちは登場すること少ない。このことから了意が『伽婢子』を書くに当たって「定住」ではなく「非定住」をモチーフとして選択したとは言えないだろうか。もちろん怪異な「はなし」を作るにおいて「諸国咄」的な方法がより有効であることもある。また了意の場合、作家論においてしばしば言及される彼の「浪人」性も右の観点から見直すことも出来るかもしれない。

- 17 注1に同じ。

- 18 注3書「出典」の項（三二頁）。

- 19 市古夏生氏「『伽婢子』における場の設定」（『国文白百合』

十四号 一九八三年三月）。

- 20 注1に同じ。

- 21 注19に同じ。

#### 〈付記〉

本稿は一九九二年度修士論文として提出したものを書き改めたものです。御指導を頂いた松田修先生をはじめ、ともに『伽婢子』を読んできた松田ゼミナールのおみなさんに、末筆ながら感謝の意を記させて頂きます。

（かとう りょうすけ・大学院修士課程修了）